

日本の形はどのように把握されてきたか —下総・常陸住人の貢献—

元国土地理院長
公益社団法人日本測量協会副会長

ほし の よし ひさ
星 埜 由 尚

経歴 1968年 東京大学理学部卒業
1973年 東京大学大学院博士課程修了
建設省国土地理院入省
2004年 国土交通省国土地理院長で退官
現在 公益社団法人日本測量協会副会長

古来我々の先祖は、どのようにして我々の国の姿を把握していたのでしょうか。鎌倉時代に写された日本図があります。嘉元3年(1305)の年紀がある西日本の欠けた地図で、京都の仁和寺が所蔵しています。この地図には、行基菩薩御作と書かれているところから、行基図と呼ばれていますが、もちろんこれは奈良時代の高僧行基に仮託されているのであって、行基が作成したものではありません。この地図には、60余州の各国が俵を連ねたように描かれています。紀伊半島や房総半島などの突出は表現されていますが、総じて単純で細長い東日本の形が描かれています。そして、同じ頃描かれた東日本の欠けた日本図も残っています。この地図では、日本を龍が取り巻き、その外側に唐土、高麗、龍及(琉球)、雨見(奄美)、対馬、隠岐などのほか、羅刹国、雁道といった想像上の地が描かれています。この地図は、神奈川県称名寺に伝わり、金沢文庫に保管されています。

中世の百科事典「拾芥抄」に載っている「拾芥抄大日本国図」(図1)も仁和寺、称名寺に伝わった日本図同様に、行基菩薩が作成したとの書き込みがあり、日本の形は、密教の法具である「独鈷」の形であると書かれています。即ち、日本は、仏教の盛んな聖なる国であるとの認識があったことが示されているのです。「行基図」と総称される仁和寺、称名寺の地図に連なるこれらの地図は、行基に仮託し、聖なる日本の形を強調することで、中世日本人の国土観を示しているといえます。

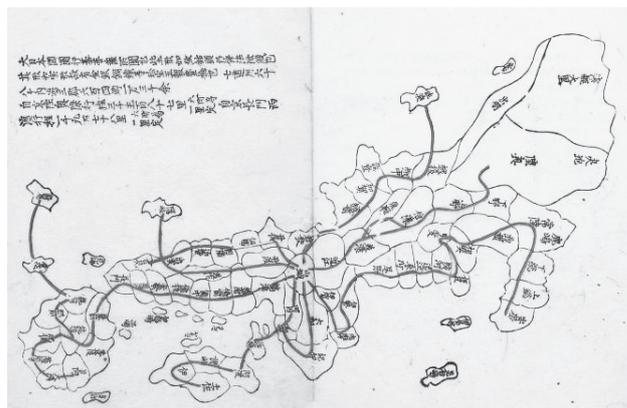


図1 拾芥抄大日本国図(蘆田文庫所蔵)

「拾芥抄」は江戸時代にも木版印刷され、そのほかの「行基図」も様々な形で刊行され、人々の手に渡っていたと思われませんが、江戸時代には「行基図」を超えた日本図が現れます。江戸幕府は、慶長、正保、元禄、天保の4度に渡って「国絵図」を各藩に命じて作成し、日本総図(図2)を作成しました(天保度については、伊能忠敬の作成した日本図があったため、日本総図は作成しなかった)。「国絵図」の作成を命じられた各藩は、領内の各村で作成された地図などを利用するほか、実地の測量も行い、「国絵図」を編集し、幕府に提出しました。幕府は、さらに「国絵図」に基づいて日本総図を作成しました。

「国絵図」は実測図ではありませんが、藩や村には測量術の心得のある藩士や上層農民がおり、「廻り検地」という測量術は、全国的に普及していました。幕府の「国絵図」は、基本のところでは実測されていたのです。「国絵図」に基づく日本総図は、「行基図」と比較すれば格段の進歩の跡を見ることができます。

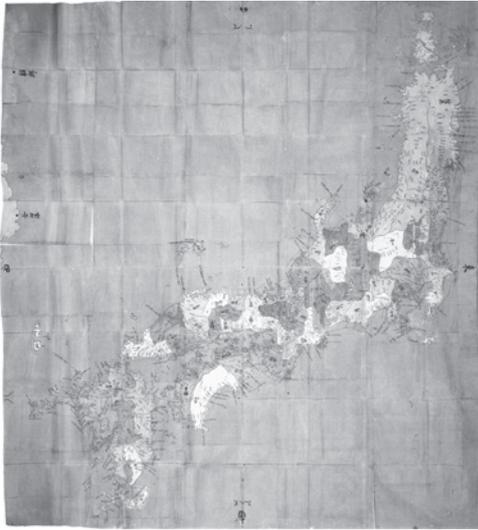


図2 正保日本図(国文学研究資料館所蔵)

「国絵図」は秘図でしたが、各藩控図の写しなどが世間にも出回り、民間でも日本図が作成され刊行されるようになります。17世紀後半の浮世絵師石川流宣いしかわともぶが作成した「日本海山潮陸図」、18世紀前半の医師寺島良安にほんかいざんちやうりくずが編集した百科事典「和漢三才図会」わかんさんさいずえの中の日本図、京都の香具師森幸安もりこうあんが作成した、初めての経緯線入り地図「日本分野図」にほんぶんやずなどが有名です。

高萩市出身の長久保赤水ながくぼせきすいは、水戸藩主の侍講にまでなった儒者ですが、地理にも造詣が深く、全国に持つ人脈を生かして、「国絵図」などの情報を集め、安永8年(1779)に「改正日本輿地路程全図」かいせい にほん よち ろていぜんず(図3)を完成させました。この地図も経緯線が入っており、森幸安の地図を参考にしたと言われています。因みに、森幸安、長久保赤水の地図の経緯線は、学問的には、経緯線とは言えませんが、経緯線を示し、日本の地球上での位置を示すという意図があったことは間違いありません。世界の中の日本という意識の表れでしょう。長久保赤水の



図3 改正日本輿地路程全図(神戸市立博物館所蔵)

地図は、伊能忠敬の全国測量による地図以前の日本最高の地図でした。木版印刷され、刊行されて広く普及し、明治期に至るまで一般に用いられました。外国にも多数もたらされています。

このような、日本地図を巡る状況の中で、伊能忠敬いのうただたかの全国測量が行われました。伊能忠敬は、千葉県九十九里で生まれ、17歳のとき、下総佐原の豪商伊能家の婿養子となりました。隠居後50歳のとき江戸に出て幕府天文方高橋至時の門に入り、天文学を本格的に学びました。55歳のときから蝦夷測量えぞそくりやうを皮切りに17年かけて全国を測量し、「大日本沿海輿地全図」(伊能図)を作成し幕府に提出しました。

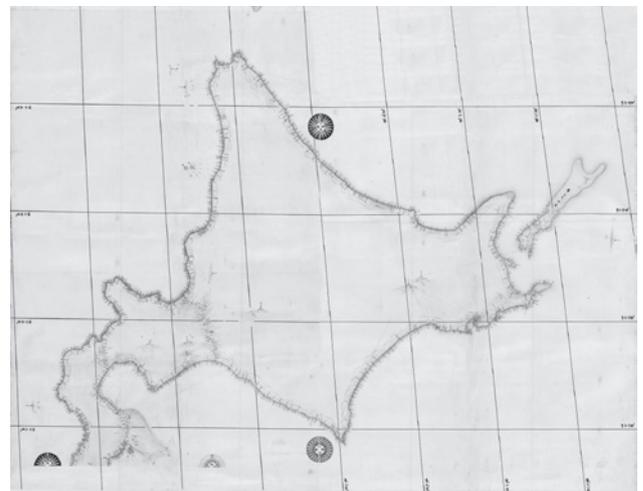


図4 伊能中図(北海道)(日本写真印刷株式会社所蔵)

蝦夷測量は、北海道南半部のみで終わり、伊能図の北海道部分(図4)については、間宮林蔵が大きく貢献しました。間宮林蔵は、旧伊奈町の出身で、樺太探検と間宮海峡の発見で有名ですが、測量は、伊能忠敬に教授されています。間宮林蔵は、北海道の測量を行い、その成果を伊能忠敬に提出しました。伊能図の北海道部分は、大部分が間宮林蔵のデータに基づくものであると考えられます。

伊能忠敬により日本の形が始めて実測により明らかになりましたが、間宮林蔵の功績もまた著しいものがあります。このことは、間宮海峡の発見などに比べ余り知られていませんが、特に強調しておきたいと思います。

紙数の関係もあり、日本図の発達について十分に意を尽くしていませんが、機会があれば、また改めて述べたいと思います。